

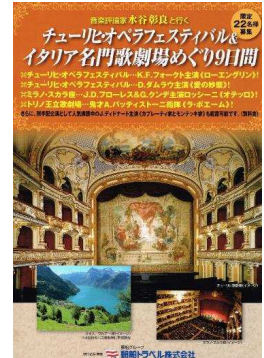
2015年7月のオペラ旅行

— チューリヒ歌劇場、ミラーノ・スカラ座、トリノ王立歌劇場 — 水谷 彰良

日本ロッシーニ協会メールマガジン「ガゼッタ」第105号（2015年7月15日配信）の文章に
写真を増補した改訂版を日本ロッシーニ協会ホームページに掲載します。（2016年8月）

筆者の同行するツアー「チューリヒ・オペラフェスティバル&イタリア名門歌劇場めぐり9日間」（郵船トラベル、2015年7月3～11日）から無事帰国しました。観劇したのはチューリヒ歌劇場の《ローエングリン》《愛の妙薬》《カプレーティとモンテッキ》（7月4日、5日の午後と夜）、ミラーノ・スカラ座のロッシーニ《オテッロ》（7日）、トリノ王立歌劇場《ラ・ボエーム》（9日）の五つ。以下、簡単に報告します。

成田を7月3日に発ち、その日のうちにチューリヒ到着。暑いなのんの…なにしろ夜になっても気温35度なんです。以後連日35～38度の異常猛暑、いや酷暑の毎日で、体感的には40度。パリでは7月1日に39度を超え、ほどなくドイツの一部でも観測史上最も暑い40度超を記録しました。筆者はヨーロッパで5万人以上が亡くなった2003年8月にもイタリアにいましたが、それに匹敵する暑さです。



◎ 《ローエングリン》（7月4日）

そんななか最初に観劇したチューリヒ歌劇場《ローエングリン》は、2012年に同歌劇場の総裁に就任したアンドレアス・ホモキによる演出。昨年4月のウィーン国立歌劇場プレミアに続いて9月にチューリヒのプレミアを迎えました（共同制作）。ローエングリン役のクラウス・フロリアン・フォークトが足を負傷し、左膝にギブスをはめての出演です。歩き方がごちこちなく、重心がずれ、腰に負担をかけながらも、持ち前の甘美な声で見事な演唱を繰り広げました。

エルザ役のエルザ・ヴァン・デン・ヘーヴァー [ヒーヴァー] は、2013年メトロポリタン歌劇場《マリーア・ストゥアルダ》の映像を通じて評価していましたが、期待にたがわぬドラマティックな発声歌唱で聴き応え充分。オルトルート役のペトラ・ラング、テルラムント役のマーティン・ガントナーの好演も相俟って質の高い上演です。問題は女性指揮者シモーネ・ヤング。2005～15年ハンブルク歌劇場の総支配人と音楽監督を兼務し、チューリヒでも人気が高かったのですが、前奏曲から音が大きく、「弱音じゃ無いかい！」と突っ込みたくなるほど。オーケストラをガンガン鳴らし、迫力ある音響に圧倒されましたが、もっと繊細な表現があってもいいのでは？



チューリヒ歌劇場の前で記念撮影



《ローエングリン》のカーテンコール

◎ 《愛の妙薬》（7月5日・午後）

翌5日の《愛の妙薬》は、アディーナ役ディーナ・ダムラウの降板を告知されて慌てましたが、代役のエレオノーラ・ブラット (Eleonora Buratto) が大変見事でした。1982年生まれだから今年33歳。名前に見覚えがあるので調べたら、2007年にスポレート国際声楽コンクールで優勝し、スカラ座で研修してムーティに評価され、2007年ザルツブルク聖霊降臨祭のヨンメリ《デモフォオンテ》に抜擢されました。以後ムーティの棒で活躍し、2014年ローマ歌劇場来日公演《シモン・ボッカネグラ》で降板したバルバラ・フリットリの代わりにアメリカを歌ったと言える思い出の方も多いでしょう。この日も広い音域に卓抜なアジリタを駆使し、なかなかの逸材と感心しました。

ネモリーノ役のパヴォル・ブレスリク（1979年スロヴァキア生まれ）、ベルコーレ役のマッシモ・カヴァッレツィ、ドゥルカマーラ役のルーチョ・



《愛の妙薬》のカーテンコール

ガッロも好演。グリシャ・アサガロフ演出の舞台はパステル調のカラフルな色彩で、左右にスライドする古典的な書割も使われます。ちなみに筆者は2010年11月にフローレス主演で同じ舞台を観劇し、そのときは指揮者ネッロ・サンティの旧弊な音楽作りに呆れました。今回は昨年ROFで《セビーリヤの理髪師》を指揮したジャコモ・サグリパンティとあって注目しましたが、チューリヒの二軍とおぼしき管弦楽団がダレた演奏をしました。ヒョロツとした今どきの若者指揮者とあって、オケがなめたのでしょうか。

◎ 《カプレーティとモンテッキ》(5日・夜)

早めの夕食をとり、夜の《カプレーティとモンテッキ》を観劇。前日会場でお会いした会員・角岡さんから、「初日を見たらジュリエッタ役のオルガ・クルチンスカ (Olga Kulchynska) が素晴らしく、もう一回見ることにしました」とお聞きしました。名前に聞き覚えがなくて当然。1990年ウクライナのリウネに生まれ、キエフの音楽院で声楽を学んで2011年からさまざまな国際声楽コンクールで賞を受けてポリショイ劇場の研修所で研鑽を積み、2014年にデビューしたピカピカの新人です。今年25歳。そしてこれがロシア以外での本格デビューとのことですが、ネトレブコのデビューしたてのように瑞々しく、輝いています。第二のネトレブコ発見!といった印象です。



《カプレーティとモンテッキ》のカーテンコール

ロメオ役のジョイス・デイドナートは、2013年5月のロイヤル・オペラ《湖の女》のときもそうでしたが、ヴィブラート過多の発声でいまひとつ。表情と演技はいいけれど、声と歌唱で新人クルチンスカに負けた感じがします。テバルド役のテノール、バンジャマン・ベルネーム (Benjamin Bernheim) も若き逸材で好印象。指揮がチューリヒ歌劇場の音楽監督ファビオ・ルイージとあって、オーケストラも前の二つとはうって変わって引き締まった演奏を繰り上げました。

演出はクリストフ・ロイ。舞台をぐるぐる回転させて幾つもの部屋を見せ、対立する党派抗争の犠牲者らしき死体がそこかしこに転がり、ジュリエッタの子供時代とおぼしき少女も登場します。この上演では歌と音楽に集中するため演出に頭を巡らせず、「舞台を回しすぎるなあ」「ずっと横たわっている死体役の助演も大変だけど、人形でないからリアリティあるな」…なんて思いながら見ていました。



コモ湖畔、ベッリーニのモニュメント

翌6日は移動日で、専用バスでコモ湖畔のモルトラージオ (Moltrasio) に宿泊。船着き場からホテルに向かう道に、ベッリーニのモニュメントがありました。そう言えば、ベッリーニはコモ湖畔のジュディッタ・パスタの別荘で《ノルマ》を作曲したのですね。前夜《カプレーティとモンテッキ》を観劇したばかりで、すごい偶然です。

◎ 《オテッロ》(7月7日)

コモ河畔からバスで移動したミラーノも暑い暑い。38度はあるんじゃないかしら…ヘトヘトになりながらもスカラ座博物館を訪問しました。昼食後にリコルディで買い物を、と行ってガッレリアのアーケードに行くと、プラダとフェルトリネリの看板を掲げて閉まっています…リコルディが無くなった?…移転か?…どこに?…聞いてないぞ!…クソ暑い中ガッレリアを探しても無いものは無い…ならば Messaggerie Musicali に行こうと思って歩いて行くと、こちらにも店が無い!…メッサッジャーリエ・ムジカーリが潰れた?…

ディスクも楽譜も通販で買えるご時世では、大きな店舗を維持するのが大変なのでしょう…そういえば、筆者もネットでばかり物を買っているなあ、と反省しきり。便利だけど、つまらない時代になりましたね。

それはともあれスカラ座のロシーニ《オテッロ》ですが、こちらもある意味「予想外」でした。ユルゲン・フリムの演出が視覚的につまらないのです。背後と両サイドを巨大なカーテンで囲い、第1幕は舞台中央に宴会のテーブルセット、右手に大きな椅子があるだけ。第2幕は安っぽいガーデンチェアをたくさん置いただけ…他にもちょこちょこ物はあるけれど、煎じ詰めればそれだけ。第3幕は殺風景な舞台にヴェネツィアの黒いゴンドラが現れ、「柳の歌」ではハープ奏者を乗せた台が人に押されて舞台を横切ります。デズデーモナがゴンドラの上で刺殺されると背後のカーテンが消え、資材の置かれた舞台裏が丸見えになる…だから何だよ、劇とぜんぜん関係ないじ

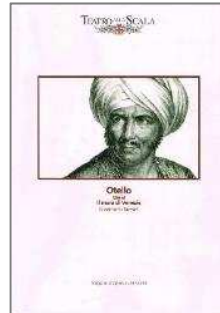


スカラ座博物館にて

ゃん。ただの手抜き、経費削減か!?

久しぶりのスカラ座。「あれ、こんなに音響が悪かったっけ?」と不思議なほど音が飛んできません。舞台を囲むカーテンが消音しているみたい…筆者は3階パルコの1列目ですが、平土間の観客もみな音が小さいと不満げです。歌手はオテロ役のグレゴリー・クンデが力強い発声と迫力で突出し、ロドリゴ役のファン・ディエゴ・フローレスを圧倒しました。でも二人とも記譜されたハイDを歌わず、肩すかしを食らった感じ。イアーゴ役のエドガルド・ロチャも健闘しましたが、劇場の音響の問題でガツンと聞こえません。デズデーモナ役のオルガ・ペレチャツコは発声が固く、歌に伸びやかさを欠き、カーテンコールにブー!が飛びました。

指揮者は当初予定のジョン・エリオット・ガーディナーからDVD化された2012年チューリヒ歌劇場プロダクションの中国人ムハイ・タン (Muhai Tang) に代わり、それはそれで期待したのですが、テンポがやけに遅くて旋律が間延びし、歌手たちも歌い難そう。かと思えば後奏だけやけに速くし、音楽のフォルムを損ねています。クンデやフローレスの方がロッシーニの音楽とテンポを良く判っているのに!



《オテロ》のプログラム表紙と当日の配役表

昨年観劇したザルツブルク上演のアンサンブル・マテウスも伴奏に精彩を欠きましたが、スカラ座管弦楽団の場合は指揮者タンのせいで音楽の乗りが悪いみたい。ちなみにスカラ座におけるロッシーニ《オテロ》の上演は145年ぶりとあって鳴り物入りの公演でしたが、一流の歌手を揃えても演出と指揮者がこれではいいとこなしです。

あ、書き忘れましたが、この演出にはいろいろ不可解な点がありました。黒板に書かれたアラビア文字にイタリア語で「不貞 (infida)」「嫉妬 (gelosia)」などと書き足すのですが、誰が誰に、どちらの言語を教えているのかイマイチ判りません。最終場も意味不明。イアーゴが平土間の背後から現れてピットに向かって歩み、なにが歌うと背後から歩いてきたデズデーモナの分身のような女性 (助演) と抱き合います。イアーゴは死んで最終場に登場せず、歌うパートも無いのに何やねん、と目と耳を疑いました。ルーチョの一節を歌ったのかどうか、一瞬の出来事なので判然としません。でも勝手に変えるのは反則! この上演でイアーゴがどこを歌ったのかご存知の方は、ご教示ください。



《オテロ》のカーテンコール

舞台写真はスカラ座のサイトにて→ <http://www.teatroallascala.org/it/stagione/2014-2015/opera/otello.html>

◎ 《ラ・ボエーム》 (9日)

翌8日はトリノーノに移動して観光と宿泊。9日はバローロの里を観光してワイナリーで試飲し、夜にトリノーノ王立歌劇場で《ラ・ボエーム》を観劇しました。席は平土間中央ブロック8列目で音響も良く、アンドレア・バッティストーニの指揮ぶりも良く見えました。ミミは当初予定のカルメン・ジャンナッタージオからバルバラ・フリットリに変更され、最初の2幕はやや声の衰えを感じましたが、第3幕のソロからヴェテランの上手さを発揮して第4幕終盤も説得力がありました。ムゼッタは、当初予定のガンベローニから代わった今年28歳のマリーア・テレーザ・レーヴァが蓮葉なキャラクターで好演。ムゼッタに続いてクレモーナでミミを歌うソプラノです。

ロドルフォ役のステーファノ・セッコ、マルチェロ役のマルクス・ヴェルヴァら4人の男声陣も秀逸で、アンサンブル・オペラとしても充実していました。演出は同歌劇場専属らしきヴィットーリオ・ボッレリによるもので、他の写実的演出…例えばゼッフィレリ…をアレンジし、突出した個性に欠けるものの視覚的な不満はなく、隅々まで透徹したバッティストーニの棒も相俟って大満足でした。終わり良ければすべてよし…ツアー最終日をトリノーノの《ラ・ボエーム》にしたのは、その意味でも正解でした。



《ラ・ボエーム》のカーテンコール

以上、三都市三劇場で観劇した 5 演目について簡単に記しました。突然の異常猛暑で体調がおかしくなるのは歌手も同じ。あの暑さの中でよくぞここまで歌い演じたものだ、というのが正直な感想です。実は、トリノーにもう一日いればアントニーノ・シラゲーザとキアーラ・アマル主演《セビーリャの理髪師》の初日を観られたのですが、日本ロッシーニ協会会員 5 人と筆者を含む 20 人のツアーで自分だけ残って《セビーリャの理髪師》を見るのはいかなものか、と考え断念しました。



モダンなデザインのトリノー王立歌劇場の入口と内部